富山大学教育学部紀要 №53：45－56（平成11年）

明治時代の公立高等女学校への音楽教員の配置

－東京音楽学校卒業生の勤務校の調査から－

坂本　麻実子

（1998年10月20日受理）

Music Teachers' Placement to Public Girls' High Schools in Meiji Period –Referring to Workplace Survey to Tokyo Academy of Music Graduates

Mamiko SAKAMOTO

キーワード：西洋音楽受容，音楽教育，音楽教員，東京音楽学校，公立高等女学校

Key words：Introduction of Western Music, Music Education, Music Teachers, Tokyo Academy of Music, Public Girls' High School.

はじめに

田山花袋の小説『田舎教師』（明治41年　佐久良書房刊）のモデルとなった小学校の代用教員は，より高い給料と社会的身分を手に入れるために，好きな音楽を生かし，中等音楽教員の資格を取ろうと，明治36年９月，東京音楽学校甲種師範科を受験した[1]。明治30年代には，若い小学校教員が中等教員を夢見て官立の高等教育機関を受験するのは，教員社会の風潮であった[2]。『田舎教師』のモデルは不合格となり，小学校の准教員で終わったが，『田舎教師』のモデルのような志を抱く者がめざした中等音楽教員について，東京音楽学校に合格し，卒業後は公立高等女学校で教えた教員たちを例にして考察したい。

高等女学校の音楽教員という集団を扱った研究は，管見の範囲では見当たらない。筆者は，東京音楽学校の年報である『東京音楽学校一覧』（東京芸術大学附属図書館所蔵。明治時代分の請求番号　377.1-O-1～5）に「卒業生姓名」欄があり，卒業生の勤務校を掲載しているのに着目し，表１（46～49頁）に示すように，明治22年から45年まで（1887～1912），公立高等女学校の教壇に立った卒業生たちの勤務校と在職年を学校ごとにまとめてみた。表１によれば，明治時代に，東京音楽学校は，全国の公立高等女学校111校に，卒業生195名（音楽取調掛全科卒４名，音楽取調掛修業證状付与伝習生３名，専修部卒25名，師範部卒17名，本科卒22名，甲種師範科卒120名，乙種師範科卒４名。表１には卒業学科を略記した。）を，音楽教員として送り込んでいた。本稿は，東京音楽学校と女子教育界の双方の事情をふまえて，東京音楽学校卒業生が全国の高等女学校に配置される過程とその背景を，表１から読み取っていく。

１．高等女学校の制度化と東京音楽学校の教員養成

近代日本では，女子に学問は不要という風潮が強く，文部省も，明治24年（1891）に『中学校令』を改正した時点で，初めて「高等女学校」を女子の中等教育機関として位置づけた。（49頁へ続く）

表１．明治時代の公立高等女学校と東京音楽学校卒業生の在職年

［北海道］
①札幌高女(35)：33専中村[堤]チセ35，36舊甲守屋[安藤]敬36，37舊甲賣間[西川]きく37-43，43甲中西フミ◎44-45
②函館高女(38)：38舊甲遠藤タキ41-43，42甲工藤富次郎◎45～
③小樽高女(39)：40甲秋山升40-42，41甲野口米次郎43-44
④上川高女(40)：44甲小泉つね44-45
［青森県］
①弘前高女(34)：24専石岡[小関]トク◎35-38，40甲中島かつ40-42，43甲中西フミ43，44甲今シゲ◎44-45～
②八戸高女(34)：29専上原[濱地，林]ツル36-37，38器阪本ソノ38，39甲岡部[妹尾]セイ39，38甲君塚正志42，43甲伴ひで◎43-44
③青森高女(41)：42甲今ゆき◎42-45～
［岩手県］
①岩手高女(30)：38甲水野富来38，40器煙山[山科]ツル◎41-44，44甲松井ヒロ44-45～
［宮城県］
①宮城県高女(30)：28専戸城[関]ヤス32，40声竹内[大島]イマ40，41甲星澤とし◎42-45～
［秋田県］
①秋田県高女(33)：28専笹山[朝倉]ミエ35，36舊甲平澤カツ◎37-43，42甲小笹[小玉]ミサヲ44，45甲松木くに45～
［山形県］
①鶴岡高女(30)：38甲日下部[近藤]千穂38-42，43甲須階ときを◎43-45～
②酒田高女(31)：44甲岡田シゲ44-45
③米沢高女(31)：26師大畠[紺野]サダ34-35，37舊甲岩倉一野37-39，37舊甲大熊しん◎42-45
④山形高女(31)：26師大畠[紺野]サダ36-41※兼山形女子師範，37舊甲長澤光治◎39-41※兼山形女子師範，37舊甲大熊しん◎41，24専石岡[小関]トク42※兼山形女子師範
［福島県］
①福島高女(30)：25専中村[宮崎]テル31，38器阪本ソノ39，38甲君塚正志40，41甲星澤とし41，42甲大立目うめよ42-45～
②会津高女(26)：42甲小笹[小玉]ミサヲ42-43，43甲鈴木あや44-45
③磐城高女(37)：44甲大谷[阿部]サワ44-45
［茨城県］
①水戸高女(33)：30専林[田井]ハル35，36甲岩堀[牛尾]源36-40，30師石井[西川]シゲ◎41-44，39甲浅尾ハツネ44-45～
②土浦高女(36)：38甲吉村リウ38-40，37舊甲布村[細野]うた42-43
［栃木県］
①宇都宮高女(８)：31専栗本清夫35-42，38声外山国彦43-44，43声荒木アキ45～
［群馬県］
①高崎高女(32)：29専上原[濱地，林]ツル34-35，25専石坂[渡瀬]トシ36-40，43器井手トミエ43-44，43甲地脇[木村]たつ45～
②郡立栃木高女(34)：40乙鈴木ひさ42-45～
③山田郡立桐生高女(41)：42甲戸田つる子42-43，44甲宮田ミヨ44，43甲伴ひで45～
④前橋高女(43)：20取内田粂太郎◎44，45甲服部ハル45
［埼玉県］
①浦和高女(32)：34専安井[中村]コウ34※研究科在学，24師高木タケ35-36，34専天野[北村]ハツ37-38※研究科在学，36舊甲牧野[堀江]むめ◎39-40
②熊谷高女(43)：45甲渡邊イワ45～
［千葉県］
①千葉高女(33)：35舊甲林[小林]たけえ35-36，37声横山[陶]イト37-39※39兼千葉女子師範
②東金高女(41)：43甲小幡静江43-44，45甲吉川ハルエ45～
［東京府］
①女子高等師範付属高女(15)：35舊甲加藤[谷野]かね35-41
②東京府立第一高女(21)：15伝加藤サダ子22，22取林テフ◎22，24専瀬川[熱田]サク◎27-29，29専由比[東]クメ30-38，38声鈴木乃婦子◎38-45～※38-42研究科在学，38器古澤[野口]きみ39-40※研究科在学，41甲清水[飯田]いく41，42器富岡静女42※研究科在学，42器原ミチ◎43※研究科在学
③東京府立第二高女(33)：24専丸山[小澤]トメ◎33-45～※36-45兼東京女子師範，42声大和田愛羅44-45～※44-45兼東京女子師範
④東京府立第三高女(35)：35舊甲荒島[藤村]すゑ35，36舊甲村田ミイ36-45～，37舊甲大門[岡部]トク38-45～
⑤東京府立第四高女(41)：41声伊藤鈴41-42
［神奈川県］
①神奈川県高女(33)：38水野富来39，41器練木[斎藤]すみ42※研究科在学，42器神谷美衛◎43-45～
②組合立横須賀高女(39)：29師宮部[辰野，高祖]フジ39-41，40甲堀[八十島]千里42-43，44甲宮田ミヨ45
［新潟県］
①新潟高女(33)：30師高井徳蔵37，38甲犬童信蔵39-40，41甲小部卯八41-44，41甲大西正直45～

②長岡高女(35)：38甲若林孫次38-41，43-45～
③柏崎高女(36)：40甲山本さだ40-42，42甲古川シヅエ42-45
［富山県］
①富山高女(34)：39甲浅尾ハツネ◎39-41，42甲古瀬紋吉◎42-45～
②高岡高女(40)：41甲吉田なを41-45～
［石川県］
①石川県立高女(31)：36器福見[梁瀬]ヒサ36-38，29専塚越クガ3940休職，37舊甲岩倉一野◎43-45～
［福井県］
①福井県高女(25)：28師今野大膳29，34師樫尾[原]トク◎35-36，37器金澤柔能37-41，37舊甲田原美喜42-45～
［山梨県］
なし
［長野県］
①長野高女(29)：29師早川喜左衛門33-36，38甲小笠原良造38-40，39甲島津ちか◎41-45～
②松本高女(33)：36舊甲豊島盈◎36-43，31専石野巍44-45～
③上田高女(34)：24専依田辨之助◎35-45～
［岐阜県］
①大垣高女(33)：38甲小田島豊治38-45～
［静岡県］
①田方郡立三島高女(34)：42声小倉すゑ42，37舊甲遠藤[山口]とよ44-45～
②静岡県高女(36)：36舊甲平澤カツ36，36舊甲守屋[安藤]敬37-39，35旧甲甲斐[内藤]蝶40-43，36舊甲平澤カツ44-45，44器山田ふく45
［愛知県］
①名古屋市立第一高女(29)：30師石井[西川]シゲ33-39，29専上原[濱地，林]ツル40-42，39器森田[山本]孝43，40甲望月清43-45～
②豊橋市立高女(35)：43甲鈴木ミツ子44，30師石井[西川]シゲ45～
③愛知県立高女(36)：42甲窪田たか45～，45甲折橋アイ45～
④名古屋市立第二高女(45)：35専中村忠雄44-45
［三重県］
なし。
［滋賀県］
①彦根高女(20)：29師宮部[辰野，高祖]フジ35，36舊甲牧野[堀江]むめ36-38，29専上原[濱地，林]ツル39，40甲尾崎[廣瀬]ヒデ40-45
②大津高女(22)：30師石井[西川]シゲ30-31，30専林[田井]ハル◎32-34，37舊甲布村[細野]うた37-41
［京都府］
①京都府立第一高女(５)：22師宇野[小木]フデ23-24，24専岩原[松本]アイ25-27，24専村松ヒデ29-30，30専小林ヤヘノ◎31-41，40器煙山[山科]ツル40，41甲市原タキ41-45～，43甲村田ミネ43，44甲里見えつ44-45～
②京都府立第二高女(37)：37舊甲新渡戸[塚原]ハマ37-41，42器香川[光井]鈴42-44，45甲宮崎タキ45
③加佐郡立高女(40)：40甲谷[成田]トシ41-42，43甲地脇[木村]たつ43-44，43甲小幡静江45
④京都市立高女(41)：40甲原田彦四郎42-43，40甲中島かつ45～
［大阪府］
①堺高女(７)：38甲澤田なを◎41-42，40甲谷[成田]トシ43-45
②梅田高女(19)：18取市川[劉]ミチ22-23，22師宮崎[石渡]タマ24-29，伝18門奈クリ30-32，伝18妹尾繁松32-35※36以降「東京音楽学校一覧」に記載なし
③清水谷高女(33)：32専河合[田村]クニ34，29専永井幸次39-45～，27専高濱孝一43-45～，44甲大島八尾◎44-45～
④郡立泉南高女(34)：40甲栢森亨44-45～
⑤夕陽丘高女(39)：40声井村[加藤]はるよ40-41，42器遠藤[渡邊]ミサホ42，41器杉浦秋乃43-44
⑥大阪市立江戸堀高女(44)：45甲森本絹45～
［兵庫県］
①兵庫県高女(34)：31専安達カウ35-38，38甲田中銀之助◎38-45～，39甲木村[田中]キセエ39-45
②組合立淡路高女(36)：39甲島村[香宗我部]藤尾39-43，44甲竹村[石田]秀子44，45甲竹村虎45
③氷上郡立高女(36)：41器土屋そう43-44，45声林豊子45～
［奈良県］
①奈良県高女(29)：30師山本静野32，25専石坂[渡瀬]トシ34-35，29師宮部[辰野，高祖]フジ36-38，37舊甲山中[根本]サダ39-40，37舊甲杉江秀41-43，44甲矢澤とめ44-45
②桜井高女(36)：38甲澤田なを43-45
［和歌山県］
①和歌山高女(24)：38甲田淵はつ◎38-42，45甲近藤[今吉]千恵子45
②町立新宮高女(39)：44甲山部幸恵44-45

［鳥取県］
①鳥取高女(30)：39甲大島常治39-40，38甲君塚正志41，42甲高橋テツ42-45～
［島根県］
①松江高女(30)：40甲堀[八十島]千里40-41
②浜田高女(33)：28師今野大膳33，20取山本生43-45～
③鹿足郡立高女(41)：45甲内田はる45～
［岡山県］
①岡山県高女(33)：37舊甲赤尾寅吉41-45～，42器富岡静女43-45
②津山高女(36)：37舊甲芝村政子37-4344休職，43甲富田小芳43-45～
［広島県］
①広島高女(34)：28師吉田信太35，35乙前田ワセ35，37舊甲大熊しん37-40，38舊甲宗像をしへ38，39甲岡部[妹尾]セイ42-43，44甲武井[小野田]ノブ44-45～
②呉市立高女(40)：37舊甲岩倉一野40，41器杉浦秋乃41-42，43甲片ともゑ岡43，39甲岡部[妹尾]セイ44-45～
③尾道市立高女(42)：44器山田ふく44，45声中田ソノ45
［山口県］
①山口高女(20)：29師黒部峯三36-45～
②厚狭郡立徳基高女(34)：37舊甲松園郷美37-40
③市立下関高女(38)：40甲原田彦四郎◎41，42甲藤巻しう42-45～
④佐波郡立高女(42)：45甲岡崎喜與45～
［徳島県］
①徳島県高女(35)：35舊甲甲斐[内藤]蝶36，38甲君塚正志38-39，37舊甲田原美喜40-41，39甲浅尾ハツネ42-43，44甲小木曽佳苗44-45～
［香川県］
①高松高女(26)：35舊甲志水操35-40，43甲山本けい43-45～
②丸亀高女(32)：40甲今井[法水]スエ40，38甲水野富来41-44，38器阪本ソノ45
③木田郡組合立白山高女(41)：44甲江中[山本]ムメ44，44器村上雪代45～
［愛媛県］
①宇和島高女(32)：40甲谷[成田]トシ40，44甲林みつ44-45～
②松山高女(33)：30師山本静野◎35-45～
③町立今治高女(32)：26師清水[長尾]ヒデ◎35-45～
［高知県］
①高知県高女(20)：37舊甲山中[根本]サダ37-38
［福岡県］
①久留米高女(30)：37舊甲田原美喜37-39，34師新清次郎39-45～
②小倉高女(31)：39甲島津ちか39-40，33師植村[中村]イシ44-45～
③福岡高女(31)：33師植村[中村]イシ36-43
④柳河高女(33)：38甲藤田コト◎38-45～
⑤市立門司高女(40)：38甲西村甫也41-45～
⑥浮羽郡立高女(40)：41甲上野モヽヨ41-44，45甲南里マサチ◎45
［佐賀県］
①佐賀高女(34)：29師島村吉門35-39※兼佐賀女子師範，41甲窪田しげ41-44，45甲中村コト45～
②町立唐津高女(41)：40乙島内ミナ◎41-42
②組合立鹿島高女(42)：44甲沼田ジユエ44-45～
③組合立武雄高女(41)：28師今野大膳45～
［長崎県］
①長崎県高女(34)：30専神山末吉40-45～
②佐世保高女(44)：41甲上野モヽヨ45～
［熊本県］
①熊本県立高女(36)：39甲鈴木善野3940休職，30専高塚鏗爾40，38甲犬童信蔵◎41-45～
［大分県］
①大分県高女(33)：28専笹山[朝倉]ミエ37，舊38甲吉田[近藤]マキ38，39甲八木原道三39-40，39甲鈴木善野41，45甲小野リウ45～
［宮崎県］
①宮崎県高女(32)：39甲三島チカエ39-40，34師矢野盛雄◎41
［鹿児島県］
なし
［沖縄県］
①沖縄高女(33)：40甲原田彦四郎40，37乙矢野勇雄45～

[外地]
①台湾高女(37)：40甲今井[法水]スエ44-45～
②台湾総督府第三高女(30)：37舊甲遠藤[山口]とよ38-40
③釜山高女(39)：39甲三島チカエ43-45～

『東京音楽学校一覧』より作成。
高女は高等女学校の略。校名は明治45年当時のもの。
（）内は創立年。卒業生は，卒業年，所属学科，氏名（[] 内は改姓），在職年の順で示す。
大正2年も引き続き在職している場合は～で示す。
◎印は，本籍県に着任したことを示す。数字は，明治の暦年をあらわす。
所属学科は次のように略す。
取：音楽取調掛全科卒業生　明治18年～21年卒。
伝：音楽取調掛修業證状付与伝習生　明治15年～18年證状付与。
専：専修部　明治22年～35年卒。
師：師範部　明治22年～34年卒。
声：声楽部，器：器楽部　明治36年～45年卒。
舊甲：師範部に入学，甲種師範科を卒業。明治35年～38年卒。
甲：甲種師範科　明治38年～45年卒。
乙：乙種師範科　明治38年～45年卒。
なお，『東京音楽学校一覧』は，音楽取調掛修業證状付与伝習生の明治36年以降の勤務校と，乙種師範科卒業生の明治36，37，38年の勤務校を記載していない。

（45頁より）続いて，明治28年（1895）には『高等女学校規程』を制定し，高等女学校の修業年限（4年。5年または3年も可）や教科目を定め，このとき「音楽」を必修とした。しかし，明治32年（1899）の『高等女学校令』の公布までは，公立校は全国でも数えるほどしかなく，むしろ私立校の方が各地で女子教育の先鞭をつけていた[3]。『高等女学校令』の公布により，明治30年代も半ばをすぎて，ようやく全国に府県立レベルの高等女学校が設立された。

高等女学校の制度化に対応するように，東京音楽学校は，明治33年（1900）9月に規則を改正し，従来の音楽教員養成課程である「師範部」を，中等音楽教員（中学校，師範学校，高等女学校で教える）を養成する「甲種師範科」（修業年限2年と2学期。入学資格は中学校，師範学校，4年制以上の高等女学校卒業生）と，初等音楽教員（小学校で教える）を養成する「乙種師範科」（修業年限1年。入学資格は高等小学校卒業生）に分けた。師範科は授業料免除であり，さらに，甲種師範科は，明治35年から学費を支給する「官費生」（卒業後に服務義務あり）を置いて，中等教員の人材確保に努めた。

次に，明治時代の甲種師範科卒業生の数を表2に示す。また，公立高等女学校に新卒採用された者の数を（）内に示す。

明治35年から45年まで，甲種師範科の卒業生は，男子64名，女子129名，合計193名で，女子が男子の約2倍である。最初の官費生が卒業した明治38年こそ，男が女より1名多いが，今日の音楽教員養成系の学科のように，全体的には女子優勢である。甲種師範科の入学資格から考えて，女子学生は，高等女学校卒が少なくないとみられる。近代日本の教育制度では，女子は高等女学校で終了するが，東京音楽学校は専門学校なので，甲種師範科は，高等女学校卒業生に開かれた数少ない進学先であった。折から，公立の高等女学校が相次いで開校し，

表2．東京音楽学校甲種師範科卒業生数

卒業年度	男	女	計
明治35年卒	1 (0)	5 (3)	6 (3)
36年卒	2 (0)	6 (6)	8 (6)
37年卒	9 (1)	10 (9)	19 (10)
38年卒	12 (5)	11 (7)	23 (12)
39年卒	6 (2)	8 (7)	14 (9)
40年卒	6 (1)	7 (7)	13 (8)
41年卒	4 (1)	9 (6)	13 (7)
42年卒	5 (1)	11 (7)	16 (8)
43年卒	4 (0)	18 (9)	22 (9)
44年卒	10 (0)	25(14)	35 (14)
45年卒	5 (0)	19(14)	24 (14)
合計	64(11)	129(89)	193(100)

『東京音楽学校一覧』より作成。
（）内は公立高等女学校新卒採用者数。

必修の音楽の教員が求められたので，甲種師範科は，毎年，新卒者を高等女学校に送り込んだ。特に，甲種師範科の3分の2を占める女子学生にとって，高等女学校は格好の就職先であり，女子学生の7割にあたる89名が高等女学校教員になった。

ところで，明治33年の師範部から師範科への改組に伴うカリキュラム改正で，習得楽器が大きく変わった[4]。師範部では，「器楽」という科目で，1年次にオルガンを毎週10時間，ヴァイオリンを毎週4時間，2年次にオルガンを10時間，ヴァイオリンを10時間，さらに箏を2時間履修した。一方，甲種師範科では，「オルガン又ハピアノ」という科目に変わり，1年次毎週3時間，2年次2時間，3年次2時間履修した。師範部時代にはオルガン並みに重視されたヴァイオリンは随意科目となり，箏は削除された。乙種師範科は，「オルガン」という科目で毎週3時間履修した。音楽教員の楽器は，和楽器よりも西洋楽器，西洋楽器の中ではヴァイオリンよりもオルガンになり，さらに中等教員にはピアノを加えた。こうして，甲種師範科生は，ピアノを弾く新世代の教員として，全国に赴任していった。

なお，東京音楽学校では，専修部，本科の声楽部や器楽部でも，教職科目を履修して中等音楽教員の資格を取ることができた。

3．『高等女学校令』公布までの東京音楽学校卒業生の配置状況

『東京音楽学校一覧』によれば，明治22年から，東京音楽学校卒業生は公立高等女学校の教壇に立っていた。東京府高等女学校（東京府立第一高等女学校の前身）には，明治15年の音楽取調掛修業證状付与伝習生の加藤サダ子，明治20年の第2回音楽取調掛全科卒業生の林テフがいた。大阪高等女学校（大阪府立梅田高等女学校の前身。大正12年に大手前高等女学校と改称）には，明治18年の音楽取調掛第1回全科卒業生の市川ミチがいた。

明治20年に開校した東京音楽学校は，予科の卒業試験の成績によって，「音楽ニ特別ノ才能ヲ有スルモノ」を専修部に，「音楽教員ニ適當ナルモノ」を師範部に入学させた（『東京音楽学校規則』第四條）。師範部には，初等教育課程と中等教育課程の別はなく，高等女学校のための教員養成は特に考えられていなかった。しかし，高等女学校の東京音楽学校に対する期待は大きく，師範部第1回生で明治22年卒の宇野フデが翌23年に京都府高等女学校（京都府立第一高等女学校の前身）に赴任した。京都府高等女学校は，明治23年7月に別科として設置した「唱歌専修科」のために，宇野を招いたという[6]。

東京音楽学校卒業生は，まず，東京府高等女学校，大阪高等女学校，京都府高等女学校という，大都市の名門校に配置された。しかも，明治28年の『高等女学校規程』により音楽が必修となるまで，東京音楽学校卒業生が教えたのは，これらの3校だけであった。

一方，文部省は，公立高等女学校の振興のため，明治26年に府県のみならず市町村による設立も認めたので，『高等女学校令』が公布された明治32年には，公立高等女学校は30校になった[6]。しかし，明治32年の時点でも，東京音楽学校卒業生の勤務校は限られており，東北1校，関東1校，近畿4校，合計6校で，公立高等女学校30校のうち20%である（51～52頁の表3－A）。

4．『高等女学校令』公布直後の東京音楽学校卒業生の配置状況

『高等女学校令』は，全国に府県立高等女学校の設置を義務づけた。しかし，予算不足や女子教育への無理解などの理由で，明治32年では，1道19県が未設置であった。その後，県立校を新設し，既設の私立校や市町村立校を県に移管し，あるいは県が補助金を出して「県立代用校」にする努力もした結果，明治36年（1903）には，府県庁所在地を中心に，各府県に1校以上の府県立校が設置され[7]，全国の公立校は83校になった[8]。

明治36年には，東京音楽学校卒業生の勤務校は，北海道1校，東北3校，関東9校，中部7校，近畿4校，中国1校，四国4校，九州2校と，一応，北海道から九州まで及ぶが，それでも勤務校の総数は31校で，全国の公立校83校のうち37%にとどまる（51～52頁の表3－B）。

表3．東京音楽学校卒業生が配置された公立高等女学校

		A．明治32年 (1899)	B．明治36年 (1903)	C．明治45年 (1912)
北海道			札幌高女	札幌高女，函館高女，上川高女
東北	青森		青森県立第一高女 青森県立第二高女	弘前高女(旧青森県立第一高女)，青森高女
	岩手			岩手県高女
	宮城	仙台市立高女		宮城県高女(旧仙台市立高女)
	秋田			秋田県高女
	山形		山形県高女	酒田高女，鶴岡高女，米沢高女
	福島			福島高女，会津高女，磐城高女
関東	茨城		水戸高女	水戸高女
	栃木		栃木県高女	宇都宮高女(旧栃木県高女)
	群馬		群馬県高女	高崎高女(旧群馬県高女)，桐生高女，前橋高女
				栃木高女
	埼玉		浦和高女	熊谷高女
	千葉		千葉県高女	東金高女
	東京	東京府高女	東京府立第一高女(旧東京府高女) 東京府立第二高女 東京府立第三高女 東京女高師附属高女	東京府立第一高女 東京府立第二高女 東京府立第三高女
	神奈川			神奈川県高女，横須賀高女
中部	新潟			新潟高女，長岡高女，柏崎高女
	富山			富山高女，高岡高女
	石川		石川県高女	石川県高女
	福井		福井県高女	福井県高女
	山梨			
	長野		長野高女，上田高女，松本高女	長野高女，上田高女，松本高女
	静岡		静岡県高女	静岡県高女，三島高女
	愛知		名古屋市立高女	名古屋市立第一高女，愛知県高女， 名古屋市立第二高女，豊橋市立高女
	岐阜			大垣高女
近畿	三重			
	滋賀	大津高女	彦根高女	彦根高女
	京都	京都府高女	京都府高女	京都府立第一高女(旧京都府高女)， 京都府立第二高女，京都市高女，加佐郡立高女
	大阪	堂島高女 (旧大阪高女)		清水谷高女，泉南高女，江戸堀高女，堺高女
	兵庫		兵庫県高女	兵庫県高女 淡路高女，氷上郡立高女
	奈良	奈良市立高女	奈良県高女(旧奈良市立高女)	奈良県高女，桜井高女
	和歌山			和歌山高女，新宮高女
中国	鳥取			鳥取県高女
	島根			浜田高女，鹿足郡高女
	岡山			岡山高女，津山高女
	広島			広島高女，呉市立高女，尾道市立高女
	山口		山口高女	山口高女， 下関高女，佐波郡立高女
四国	香川		高松高女	高松高女，丸亀高女，白山高女
	徳島		徳島県高女	徳島県高女

四　国	愛　媛 高　知		松山高女，今治高女	松山高女，今治高女，宇和島高女
九　州	福　岡 佐　賀 長　崎 熊　本 大　分 宮　崎 鹿児島		福岡市立高女 佐賀県高女	小倉高女，久留米高女，柳河高女，門司高女，浮羽郡立高女 佐賀県高女，武雄高女，鹿島高女 長崎高女，佐世保高女 熊本県立高女 大分県高女
沖　縄				沖縄高女
外　地				釜山高女（朝鮮） 台湾総督府高女

『東京音楽学校一覧』より作成。

ところで，明治36年の甲種師範科の卒業生（ただし師範部時代の入学なので，舊甲種と称した）は8名である。そのうち，男子2名は中学校と師範学校に採用された。女子6名は全員が府県立高等女学校に採用された。次に，36年生8名の明治36年から45年までの10年間の職歴をたどってみよう。氏名のあとの県名は本籍県，数字は明治の暦年である。

①村田ミイ（新潟）
　36-45～東京府立第三高女，42-45～東京音楽学校講師
②井手茂太（長野）
　36-40飯田中◎，41-43松本女師◎，44-45～松本師範◎
③牧野[堀江]むめ（埼玉）
　36-38彦根高女，39-40浦和高女◎，41なし，42滋賀女子師範，43なし，44在朝鮮，45なし
④平澤カツ（秋田）
　36静岡県高女，37-43秋田県高女◎，44-45～静岡県高女
⑤豊島盈（長野）
　36-43松本高女◎，38-40（兼）松本女子師範◎，44休職，　45死亡
⑥岩堀[牛尾]源（静岡）
　36-40水戸高女，41-45～私立山中高女（広島）
⑦九島[松村]和三郎（秋田）
　36-37徳島師範，38-45～神戸市小学校教員
⑧守屋[安藤]敬（神奈川）
　36札幌高女，37-39静岡県高女，40-45～私立三輪田高女（東京）

①の村田は，東京府立第三高女に採用され（35年甲種卒荒島[藤村]すゑの後任），42年からは母校の講師を兼任した。②の井手は，本籍のある長野県の学校を歴任した。③の牧野は，彦根高女（29年師範部卒宮部フジ［辰野，高租］の後任）で2年（牧野の後任は29年専修部卒上原［濱池，林］ツル），本籍のある埼玉県の浦和高女（34年専修部卒天野[北村］ハツの後任）で2年教えたが，『東京音楽学校一覧』によれば，42年に牧野は堀江姓となり，その年の滋賀女子師範勤務を最後に教職を離れた。④の平澤は，新設の静岡県高女に採用されたが，翌37年に本籍のある秋田県高女で7年教え（28年専修部卒笹山［朝倉］ミエが35年に退職していた），44年に静岡県高女に復職した（秋田県高女の後任は42年甲種卒小笹［小玉］ミサヲ）。平澤の不在中の静岡県高女は，平澤の同期である⑧の守屋が37年から39年まで，35年甲種卒の甲斐蝶が40年から43年まで教えた。⑤の豊島は，本籍のある長野県の松本高女に東京音楽学校から初めて採用され，38年から40年には松本女子師範

も兼任したが，44年に休職し，翌年に死亡した（豊島の後任には，31年専修部卒の石野巍が松本高女に，同期の②の井手茂太が松本女子師範に着任した）。⑥の岩堀は，水戸高女（30年専修部卒林［田井］ハルの後任）で5年教え（後任は本籍茨城県の30年師範部卒石井［西川］シゲ），41年から広島県の私立山中高女に移った。⑦の九島は，徳島師範で2年教えたあと，神戸市で小学校教員の道を選んだ。⑧の守屋は，札幌高女に赴任したが（33年専修部卒中村[堤]ﾁｾの後任），翌年に④の平澤の後任となって静岡県高女で3年（札幌高女の後任は37年舊甲種卒賣間［西川］きく），40年からは東京府の私立三輪田高女で教えた。

以上，舊甲種師範科36年生の勤務した高等女学校は，36年生の前任者または後任者，あるいは前任者と後任者の両方が東京音楽学校出身者である。そして，東京，浦和，水戸，静岡，松本，秋田，彦根，札幌といった勤務地をみると，東京のような大都市と地方の有力都市の高等女学校を中心に，東京音楽学校卒業生の「指定席」が形成されつつあることを感じさせる。ただし，東京の府立校に比べて，地方の県立校の指定席は，卒業生の間で短期間に次々に回される傾向がある。

5．明治40年代の東京音楽学校卒業生の配置状況

明治40年代になると，府県庁所在地以外の市や町，郡部にも，2校目，3校目と公立高等女学校が増えていった。また，文部省は，明治43年（1910）に『高等女学校施行規則』を制定し，普通教育の高等女学校に対して，修業年限が短く（2～4年），裁縫や家事を重視した主婦教育を行う「実科高等女学校」の設置を認めた。その結果，明治が終わる45年には，公立高等女学校は156校，公立実科高等女学校は78校を数えた[9]。ただし，小学校同様の「唱歌」という科目名で音楽教育を行った実科高等女学校は，少なくとも明治時代には，東京音楽学校甲種師範科卒業生の勤務校にはならなかった[10]。

明治45年には，東京音楽学校卒業生が勤務した高等女学校は，北海道3校，東北11校，関東13校，中部17校，近畿16校，中国11校，四国7校，九州12校，沖縄1校，さらに外地も2校あり，総計は93校である（51～52頁の表3－C）。これは，全国の公立校156校の59％にあたり，やっと半数を越えた。また，東京音楽学校卒業生が2人以上配置されている府県は，明治36年は1府3県どまりだったが，45年には1道3府22県に増えた。逆に，東京音楽学校卒業生が一人も配置されていない府県は，明治36年は22県もあったが，45年は5県に減った。

ところで，明治40年代には，教育用楽器として，ピアノはまだヴァイオリンほど普及していなかったので，東京音楽学校卒業生の勤務校が全国に広がるとともに，「従来東京音楽学校師範科にはヴァイオリンの科目なく，同校卒業後地方に職に就く者の不便甚少からざる」（『音楽界』第3巻第6号「楽報」欄52頁　明治43年6月）ことが問題になった。そこで，東京音楽学校は，明治43年度から甲種師範科の器楽の科目名を「オルガン又ハピアノ」から「オルガン，ピアノ，又ハヴァイオリン」に改め（『東京音楽学校一覧』第四規則第十九條），ヴァイオリンを追加した。翌44年度からは，ピアノ，オルガン，ヴァイオリンの中から一つを選修し，一つを随意科目とすればよいことになった（『東京音楽学校一覧』第四規則　第十八條）。しかし，こうした「配慮」はいかにも中央の発想だろう。たとえば，愛知県高等女学校は，明治43年の新校舎落成記念として，同窓会からピアノを寄贈してもらったように[11]，地方の高等女学校でもピアノを獲得する方向に進んでいた。東京音楽学校卒の音楽教員は，各地でピアノ推進者として尽力していたのではないだろうか。

むすびに

明治32年の『高等女学校令』を機に，全府県の主要な市や町に設置された高等女学校は，明治日本の女子にとって，地元での最高学府であった。西洋音楽は，女子のエリート機関である高等女学校の象徴として機能してきた面があり，音楽教員もエリートが求められた。東京音楽学校卒業生は，旧音楽取調掛時代から，大都市や地方の有力都市

の名門校を中心に配置されていた。東京音楽学校も，明治33年に師範部を改組した甲種師範科によって本格的に中等教員養成に取り組むようになり，卒業生の配置先も全国に広がっていった。東京音楽学校の教員でも，明治34年に助教授の小関トクが弘前高等女学校へ，翌35年に助教授の高木武が浦和高等女学校に赴任した例がある。特に，弘前高女は，小関に続き，中島かつ，中西フミ，今しげ（明治38年の母校卒業生）と，次々に東京音楽学校から音楽教員を採用し，明治36年以降，毎年音楽会を開催して弘前音楽界をリードしていったことは，学校史に誇りをもって記述されている[12]。

確かに，弘前高女のように，地方で東京音楽学校から切れ目なく音楽教員を採用できた学校は幸運であった。全国の公立高等女学校の中で，東京音楽学校の卒業生の勤務校が占める比率は，全府県に公立校が完備した明治36年で37%，明治45年で59%であり，高等女学校の増加に東京音楽学校の教員養成はとても追いつかなかった。次に，『音楽界』[13] 誌上に掲載された「中等教員の払底」と題する記事を引用する。

目下各種教員の供給多く需要割合に少なき状態なるに，独り音楽教員は甚不足にして，全国の師範学校にて現に約十名の不足，公立高等女学校にては現に約四十名の不足，中学校及郡私立の高等女学校に至りては算なく，何れも有資格者は到底得られざればとて，無資格者を求むれども，到底補充する能はざる由。

（『音楽界』第4巻第9号「楽報」欄　54頁。明治44年 9月）

東京音楽学校の甲種師範科は，中等音楽教員養成の本道であるが，中等教員になるには，「無試験検定」（文部省が定めた官立校，私立校の卒業証書があれば教員免許が認められる）や「試験検定」（検定試験によって教員免許を取得する）という方法もあった。しかし，現実には，相当数の「無資格者」も任用されており，それでも，教員不足は解消しなかった。慢性的な教員不足状態であればこそ，東京音楽学校の甲種師範科卒業生は，当初は服務義務により指定された学校に配置されても，より良いポストを求めて異動していった。また，表1をみると，乙種師範科卒業生でも，少数だが，高等女学校教員がおり（栃木高女の鈴木ひさ，広島高女の前田ワセ，唐津高女の島内ミナ，沖縄高女の矢野勇雄），学歴や資格がなくても，歌や楽器の演奏技術があれば，高等女学校の教壇に立てる可能性もなくはなかった。したがって，東京音楽学校受験に失敗した『田舎教師』のモデルも，もし，若くして病死せずに，野心を持ち続けていれば，小学校教員から中等音楽教員に転身する道もあり得たかと思う。

音楽教育を通じて西洋音楽に目覚めたという日本人は多いが，日本での西洋音楽の普及には，今日では歴史の中に埋もれた数多くの音楽教員たちの立身出世の物語が多数存在していたことを音楽史研究は忘れてはならないだろう。

注.

（1）拙稿①「『田舎教師』のモデルにみる明治30年代の西洋音楽受容」『人間文化研究年報』第13号　1990年 3月　13－25頁
拙稿②「代用音楽教員の領域－『田舎教師』からの近代音楽史展望－」『人間文化研究年報』第19号　1996年 3月　9－15頁

（2）天野郁夫『学歴の社会史－教育と日本の近代－』新潮社　東京　1992年　176－183頁

（3）筆者は，公立高等女学校に先駆けてピアノ指導を行ったプロテスタント系女学校を考察している。拙稿③「明治末期の地方ピアノ界とプロテスタント系女学校－仙台と広島の事例から－」『桐朋学園大学研究紀要』第24集掲載予定，印刷中。

（4）東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇　第一巻』音楽之友社　東京　1987年　461－469頁参照。

（5）京都教育会編『京都府教育史　上』京都教育会　京都　1940年／複製版　第一書房　東京　1981年　606－609頁

（6）高等女学校研究会編『高等女学校の研究』（高等女学校資料集成　別巻）大空社　東

京　1990年　資料25頁

（7）『高等女学校の研究』89－90頁

（8）『高等女学校の研究』資料26頁

（9）『高等女学校の研究』資料26頁

(10) 参考までに，八戸高等女学校は，明治34年に青森県立第二高等女学校として開校したが，明治45年に実科高等女学校に転身した。同時に，音楽教諭の伴ひで（明治43年甲種師範科卒）は，群馬県の桐生高等女学校に異動した。

(11) 愛知県第一高等女学校史編集委員会編『愛知県第一高等女学校史』愛知県第一高等女学校史刊行会　名古屋　1988年　24頁

(12) 校史編纂委員会編『八十年史－青森県立弘前中央高等学校』青森県立弘前中央高等学校創立八十周年記念行事実行委員会　弘前　1980年　92－94頁，125－128頁

(13) 『音楽界』は，復刻版（大空社　東京　1995年）を使用する。